

「主イエスよ、来たりませ」

伝道者の書 1 : 1 - 11

マタイ 25 : 1 - 13

(1)

四つの福音書で語られた主イエスの教えの多くは、譬えも含めて、多くは気がついていないと思われませんが、明らかに、終末的な背景のもとに語られています。

例えば、主イエスの「神を愛し、隣人を愛しなさい」という具体的な教えの背後に、「神の国が近づいた」、「時は縮まっている」、「終わりの時には、お互いの愛が急激に冷える」、「それだから、終わりの日に備え、自分を愛し、隣人を愛しなさい」というのが、本来の意味でありましょう。福音書の中の教え一つ一つを意深く読むなら、そうした背景の下に語られています。

「ナザレ人イエス」というお方の生涯が素晴らしい生涯であることは、万人が認めていることです。確かに、キリストは、世界の三大偉人の一人に数えられています。けれども、多くの人はキリストを、単なる「過去の人物」と理解していません。教会は、はじめから、それとは違う受け止め方をしてきました。

使徒信案の一節「、か」こより来

たりて、生ける者と死ねる者とを審き給わん」との告白があります。イエス・キリストは、世の終わりに、「再びか」こより来りたもうお方」であります。

みなさんの中には、これからキリストを信じたいと願っている方がいるかもしれません。上からの熱心が与えられて、この信仰と希望に生きるものとなって頂きたいと願っています。しかし、キリストを信じるとは、二千年前、キリストが十字架に架かり、葬られ、三日目に甦られたと告白するだけでは、いまだ、必要十分とはなりません。さらに、「か」こより来たりたもう」の告白が求められています。

何故なら、キリストが復活してから49日目、昇天に際して、弟子達に対して、「みなさんさようなら」とは言いませんでした。「再び、わたしは来る」との言葉を残して昇天されたからです。

「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであらう」一、

「あなたがたが見たのと、また同

ところで、十人の乙女の譬えは、花婿がいつ来るか、いつ来るかと期待して待つ時の流れは、現在から将来ではありません。むしろ将来から現在へと逆流しはじめます。婚約したその日から、二人の日々は、意味なく、タラダラと流れる時ではありません。近いうちに一緒になれるという期待と喜びとに向かって、胸を膨らませる時です。

初代教会の信徒は、まよなく、そうした思いに胸を膨らませていました。わたしたちは別れ際に、「それじゃあ、また明日ね」との言葉を交わして別れます。しかし、初代教会の信徒同士の間は、「マラナタ」でしたが、どうも、この「マラナタ」という意識が、私たちの間から、次第に後退しているように思われます。以前、東京では「再臨待望会」が熱心に行われていましたが、最近はどうさも耳にしなくなりました。21世紀となり、世界がこれから、ますますよくなると手放しで考えている人は、まずいないと思われるます。希望を見いだしにくい時代となりました。それでは、ただ、ただ、現実を追いかけ、現実を追い回され、その日々をこの生き方をし

ていればそれが良いとはなりません。今少し現実から目を離し、来たりつつあるお方に目を向けなくてはなりません。

「あなたがたのうち、主を恐れ、そのしもべの聲に聞き従い、暗い中を歩いて光を得なくても、なお主の名を頼み、おのれの神にたよる者はだれか」(イザヤ50:10)これは預言者イザヤの言葉です。

「ブルムハルト」というドイツの牧師は、自分の庭に、いまだ、誰も人を載せたことのない四頭立ての馬車を用意しました。ある人が「あれは何のためですか」と尋ねました。すると、「あれはね、イエスさまが再び来られる時、いつでも、わたしが一番最初にお迎えできるための用意です」というのです。

皆さん、笑ってはいけません。お伽話してはありません。

確かに、主イエスが再び来られる時、馬車で迎えに出るようないかたで来ることはないでしょう。しかし、それでも、あえて、馬車を庭に置いていたというのは、たえず目をさまして、来たるべきお方を待ち望んでいたことのアかしであります。喜びと期待に満ち溢れた彼の信仰の現われです。

わたしとあなたとは、それほどま
で、生き生きとした「マラナタ」
の信仰に生きていくべきでしょうか。

キリストを知る以前のわたしは、
ちは、せいせい、目に見える、移ろ
いぬくものを目当てにして生きて
いました。それが、いかに空しいも
のかと思われ、その時から、わたし
たちの生きる目的も目標も、すべ
てをこのお方、キリストに標準を
あてて、日々歩んできました。

たとえ・・・です、お互いの歩み
が、日々、いかにおぼつかなく、く
すれやすく、小さなものであると
しても、それが永遠に向かう一歩
であると知れば、これほど励みは
ありません。

(3)

マタイ25章の譬えは、花婿の
来ることを待ち望んでいた十人の
乙女たちの話です。乙女は二組に
分かれています。五人は賢く、五人
は愚かといわれています。賢い乙
女は予備の油を用意していました。
ところが、愚かといわれている乙
女は、油の用意をしていませんで
した。仮に、携帯用のような小さな
ランプであれば、少しだけ予備の
油を備えておけば良かったのです。
この二組の乙女たちは、それぞれ

が待ち望む者の決断が問われてい
ると思われます。

「決断」とは、どちらを選び、あち
らを選ぶということではありませ
ん。「あれも、これも」ではなへ、
「あれか、これか」です。この「あ
れか、これか」の厳肅な決断が求め
られています。つまり、この譬えは、
「あなたとしてはどちらをえらぶ
のか」という決断です。

少しだけ待ってくださいと保留す
ることや、中間的な態度をとろう
とすることは許されていません。

適当にごまかして、どうでもいい
でしようかと逃げてはなりません。

十人の乙女たちは、明かりをとも
しながら、花婿の来るのを待って
いました。しかし、花婿が来るのが
遅いので、眠り込んでしまったの
です。見る限り、両者に何の違いも
ないように思われます。あえて、違
いを言えば、予備の油―、それも、
少しの油で良かったのですが―、
その用意があったか否かです。

この「油」が何を意味しているかは、
具体的にはわかりません。あれこ
れ、推測し詮索するよりは、許され
ていますが、しかし、この予備の油
が何を指しているかがわからなく
ても、予備の油とは「マラナタ」

「主イエスよきたりませ」という
待望の油と深く関係していること
は明らかです。

予備の油を用意しないで、ただ明
かりをともし続けていた五人の乙
女とは、現在が明るければ、それで
いいと、現在のみ生きていたので
はないでしょうか。

地上にいる時だけ真面目に信仰に
生きればそれでいい、来るべきお
方を目当てに生きなくともいいで
はないかとする生き方は、いずれ
行き詰る、明かりが消える時が来
るのです。

少しでも油を用意しておくこ
との大切さが問われていると思わ
れます。

キリストが再び来たり給う時、万
物が更新されます、新天地がも
たらされます、私たちの卑しい身
体が栄光の身体に変えられます、
と約束されているとすれば、なん
と期待に満ちた、素晴らしい時で
はないでしょうか、来たるべき
時に、大いなる期待と喜びとが待
ち受けているーしかも、それがた
だ、単なる約束や、夢物語ではあり
ません、キリストを信じる多くの
者が、「信仰の中心」をそこに据え
てきたのであります。

キリスト者三代目という家庭に招
かれたことがあります。トイレの掛
中に「主イエスよきたりませ」の掛
け軸があるではありませんか。来
たりたもう主を信ずるとは、まさ
しく信仰生涯を賭けた告白である
ことに気づきました。

内村鑑三は、一人娘のルツ子さ
んを亡くされました。19歳の時、
原因不明の病を発症し、臨終の3
時間前に、「感謝」「感謝」と言いな
がら、「もう行きます」という最後
の言葉を残して、天に召されまし
た。墓地に埋葬される時に、鑑三は
一握りの土をつかみ、その手を高
く上げ、甲高い声で「ルツ子さん万
歳」と大声で叫んだといっています。こ
の時から、内村は再臨信仰に目覚
めたといえます。

千葉の精神科の医者がガンとの診
断を受けた時から、心理学や宗教
書といわず、生命に関する本を、手
当たり次第読み漁り、千冊の本に
目を通したといっています。しかし、
最後の最後に、彼の心を揺り動か
した言葉とは、M・ルターの言葉で
した。表紙の真ん中に、リンゴの樹
が一本描かれています。表紙を開
くと、ルターの言葉が大きな文字
で記されています。ところが、彼

は、ルターの信仰的な背景などまったく知りませぬ。しかし、その彼が、図らずも、ルターの言葉から、「パルーション」の真髄に触れる機会となりました。

M・ルターは、宗教改革の厳しい戦いのさなか、日々自分の死と向かい合いながらも、その時彼を支えていたのが、この「パルーション」の信仰です。

「天地が明日崩れるかもしれない。万物が明日滅びるかもしれない。それでも、わたしは裏の庭にリンゴの樹を植える。しかも、静かにリンゴの樹を植える」「一、こうしたことが言えるのには、将来に、確かなる希望をもつ者だけが言えた言葉といえないでしようか。

「さあ、花婿だ、迎えにでなさい」という叫びが聞こえた時、「油を少し分けて下さい。わたしたちのあかりが消えますから」という時が必ずきます。しかし、多くは、太平のねむりにふけり、ウトウトと寝入っているかもしれませぬ。

しかし、その時、予備の油をもっていたかどうかだけが問われるのではあります。

【祈りまわし】

天のお父さま、主イエスが地上に

お生まれになられたことを感謝します。今、わたしたちは、そのお方が再び来られることを待ち望んでいます。小さなフンペー、少しの予備の油を用意する心得をわすれず、目をさましているものとしてくださいます。

主イエス・キリストの名により祈ります。「アーメン」。